

青木繁《海の幸》誕生をささえた小谷家と富崎村の人びと

小谷福哲（青木繁《海の幸》誕生の家・小谷家当主）

1. はじめに

私は、青木繁没後 100 年にあたる 2011(平成 23)年3月、青木の故郷・福岡県久留米市を訪ねた。石橋美術館では、青木繁没後 100 年展が開かれていた。300 点の作品が公開されるなかで、《海の幸》【表紙1】をはじめ布良で描かれた作品の多さに圧倒された。なかでも、美術講座のタイトルが「布良という聖地～《海の幸》が生まれた地」であることに驚いた。100 年前の先祖がつないだ縁を思い、感無量であった。

青木が愛した標高 300mの「けしけし山」頂上から久留米市街を一望し、坂本繁二郎らが建てたという碑の前で、命日祭「けしけし祭り」がおこなわれた。私は小谷家当主として、青木繁の遺族・高山喜一郎さんや、ひ孫にあたる石橋鉄也さん、檜原利則久留米市長さんと並んで、「かつぼ酒」の儀礼に加わらせて頂いた。

青木の生家を復元した青木繁旧居があり、ご近所の皆さんが保存会として管理運営をしている。館山では、青木繁《海の幸》誕生の家として、築 120 年の当家を保存し、ここと同様に公開していこうという活動をすすめている。同じ志をもつ皆さんと交流をし、活動の経緯につ

いてご教示を受け、激励して頂いた。

青木繁が滞在した明治期は、布良と相浜という2つの漁村は富崎村といった。現在の館山市富崎地区である。没後 50 年の 1962(昭和 37)年には、田村利男館山市長と青木繁の旧友をはじめとする画家の皆さんが、布良に記念碑【表紙1】が建てている。

小谷家住宅【表紙2】を後世に残したいと願う皆さんの想いに応え、父・小谷栄は私宅を後世に保存し、公開に供することを承諾した。この決断に私も賛同し、親族にも了解を得た。この経緯において、個人住宅としては初めて、館山市指定有形文化財となった。

近年、少子高齢化が急速にすすむ漁村集落の活性化を目ざし、富崎地区コミュニティ委員会や同地区連合区長会の皆さんが中心となって、「青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会」(以下、青木保存会)を発足し、事務局はNPO法人安房文化遺産フォーラム(以下、NPOフォーラム)に付託された。

青木繁を敬愛し当家を保存したいと願う画家の皆さんも、NPO法人青木繁「海の幸」会を組織された。チャリティの青木繁「海の幸」オマージュ展や募金などを、館

小谷家住宅の創建及び沿革（館山市有形文化財指定調書より）

小谷家の所在する布良(めら)は房総半島最南端に位置している。布良浦は潮流が激しく古くから魚介類の宝庫で、延享年間には鮪延縄漁も創始されて布良は漁村として大いに栄えた集落である。

小谷家は江戸時代から続く漁家で、昭和 19 年に廃業するまで船主であった。明治には布良村漁師頭や布良救難所看守長を務めるなど、村の指導的役割を果たした家柄である。

布良は明治9年、明治 22 年、大正 2 年に大火を被り、それぞれ 229 戸、74 戸、137 戸が焼失している。当時の家屋はほとんどが茅葺き屋根であったと思われるが、次第に屋根を瓦葺きにするなど不燃化を考慮した造り方に変化していったものとみられる。

小谷家住宅は、明治9年大火後に再建されたと言われている。しかし、間取りや垂木止めに洋釘を用いるなど、明治初期の造りよりも新しい傾向を示しており、明治 22 年大火後の再建と考えた方が妥当である。また、明治 37 年にはこの住宅の「オクフタマ」に洋画家青木繁が逗留していることや客座敷平書院の欄間彫刻に橘義信作の刻銘(注 2)があり、義信は明治 20 年代から活躍して大正 15 年に没していることから、明治 22 年大火後の再建を裏付けている。

住宅は建ちの低い桟瓦葺きの平屋建てで、内部に土間はなく下手に差し掛けの土間・炊事棟を建て、安房地方に多く見られる分棟型に近い形態をとっていたとみられる。あるいは農家とは異なった漁家としての性格が出ているとも考えられる。この差し掛け部分は昭和 43 年ごろに建て替えられ、背面上手裏の連続した 2 か所の押入も後に増築された。

山市ふるさと納税を通じて、修復基金を募ってくださっている。石橋財団様の助成金や館山市の補助金も決まり、待望の修復工事が2014(平成26)年4月より始まった。まず物置を増改築して、家族の居住部を移し、文化財本体の母屋を半解体で修復して、2016(平成28)年春に公開の予定である。

これだけ多くの人びとを動かす青木繁の力を感じる。また、名画《海の幸》誕生に貢献した我が家の先祖に対しても、改めて尊敬と感謝の念を抱くとともに、後裔の責任として身が引き締まる思いである。

青木が滞在した当時の当主は喜録といい、私の三代前の先祖である。私の母・トシは、当時6歳だったゆき(私の祖母)から「障子に穴をあけて覗いたら、女の人が裸を描いてもらっていた」と聞き継いでいる。小谷家は代々婿養子が多く、父・栄と私もそうである。これを機に、今まで開いたことのなかった納戸や押入の整理を始めたところ、明治期の資料や書画が大量に発見された。保存会やNPOフォーラムのメンバーとともに、調査をすすめている。

2. マグロ延縄船発祥の漁村

なぜ当家では、4人の若者を40日も無賃で世話をできたのか不思議であったが、思っていた以上に、先祖は村の重要な役割を果たしていたと思われる。明治期の富崎村も、近代水産業の上で極めて重要な漁村であったこともわかってきた。新しい資料が次々に発見されていることもあり、現在わかる範囲で、明治期の小谷家と富崎村の一端を考察したい。

布良はマグロ延縄船の発祥の漁村として繁栄を極めていた。1881(明治14)年には83隻のマグロ延縄船があったといわれる。森田徳平著『房州船方伝』(房日新聞1982年)によると、1909(明治42)年のマグロ水揚げ金額調査では、全国872,342円のうち布良は199,812円とあり、4分の1を占めていたことが分かる。いつしか布良の港には「銭の雨が降る」とまで言われたように、多数のマグロ延縄船が集まり、空前絶後の活況を呈していたという。

冬のマグロ漁は危険なため、水難事故が絶えなかった。明治初年から大正元年までの明治期において、遭難隻数が約90隻で遭難殉職者数推定350人とされ、残さ

れた妻たちは「後家」、つまり未亡人になったということで、“布良の後家船”と語られてきたという。けれども理由はそれだけではなさそうである。マグロ延縄船の造船のためには多額の資金が必要であったので、東京日本橋をはじめ江戸魚河岸にある豊富な資金が投入され、結局は、布良は江戸の魚問屋に縛られていったといわれている。資金融資とはいっても借金であり、返却金のために厳しい操業が強いられていった。その結果、遭難事故もあいついで起き、1902(明治35)年の大遭難では、8隻が遭難して乗員51名が犠牲者となったのである。冬の夜に真南の水平線上に赤く輝く布良星(学名カノープス)は、遭難した布良の漁師たちの魂であるとの伝承が全国に知られている。

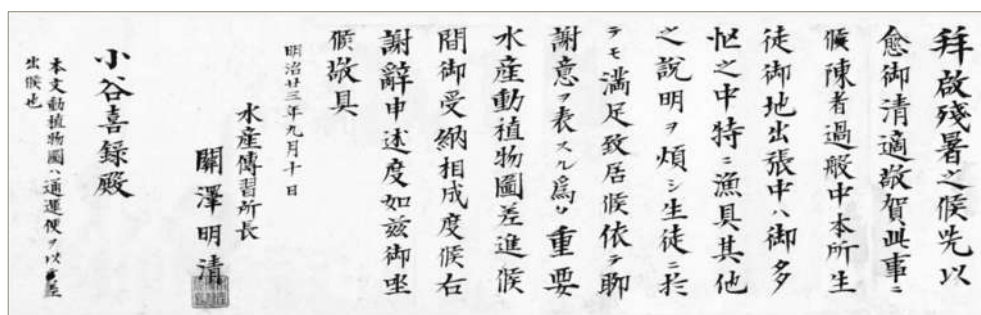
しかし、近年マグロはおろか他の海産物も獲れなくなってきた。現在の富崎地区には漁業協同組合が2つあるものの、漁船も10数隻と大激減し、専業漁師も数が少ない。唯一の地場産業である漁業が成り立たなくなっている。地区は約500世帯、人口は約1,000人と、明治期の3分の1に激減し、少子高齢過疎化が進み、高齢化率47%となっている。仕事もないので、若者は流出し、市街地に住んでいる。そのため100年続いた富崎小学校は、2012(平成24)年に統廃合され、現在休校になってしまった。

もう一度、あの頃の活気を取り戻したい。せめて、子どもたちに誇りと元気を伝えたい。その願いが小谷家住宅の保存運動への原動力である。小谷家住宅を修復し、“青木繁「海の幸」誕生の家”として一般公開されることが起爆剤になって、富崎地区全体、ひいては館山市の地域振興につながれば幸いである。

3. 関澤明清の書簡と『日本重要水産動植物之図』

我が家の押入れから見つけた資料のなかで、最も注目すべきものは、水産伝習所長の関澤明清の書簡である。当主・小谷喜録に宛て、「本所生徒が御地出張中はご多忙のところ、特に漁具その他の説明でお世話になり満足している」と書かれた礼状である。

関澤は近代水産業のパイオニアといわれ、サケ・マス



の人口ふ化や缶詰技術、アメリカ式捕鯨銃の導入、そして揚繰網漁の改良や水産教育の推進などで近代水産業の大きな貢献をしている。水産学者・大場俊雄氏の研究によれば、1890(明治23)年8月3日から29日にかけて、水産伝習所の実習が、千葉県根本村(現南房総市)と太海村(現鴨川市)で実施している。マグロ延縄漁で栄えていた布良は、根本村と隣接しているため実習で立ち寄ったのであろう。興味深いことに、我が家には、先代の治助が水産伝習所と同じ住所から自宅に出した手紙が残っている。何かしら東京で深く関わっていたことがあり、布良の実習で喜録が世話をすることになっていたのではないかと考えられる。

さらに関澤書簡には、お礼として『日本重要水産動物植物之図』【表紙2】を贈ると書いてある。改めてよく見たら、古くから当家に掲示してある3枚の立派なカラー魚貝図が、まさにそれであった。「明治21年農商務省制作」と印刷されており、貴重なものであるとわかった。



当家滞在中の青木は、友人の梅野満雄に書いた絵手紙【口絵2】のなかで、40種類もの魚貝類の名前を列挙している。どうしてこれほど覚えられたのか不思議であったが、珍しい魚貝図に興味深く眺めていて、実際に漁港で揚がる魚名を漁師たちに教わったのだろうか。

なお、本図に関しては、カラー石版との研究論文もあるようだが、島田吉廣氏(労働大臣認定カラーキャナー1級技能士)はコロ印刷ではないかと指摘する。

一方、関澤は1892(明治25)年から館山町に居を構え、自ら遠洋の漁労に従事している。偶然にも、私の実家(旧姓・長谷川)は、かつて関澤と同じ番地で先代が造船業を営んでいた。未調査だが、何か関係があるかもしれない。これもまた不思議な縁である。

4. 漁村のリーダー、小谷家の先代・治助

青木繁が滞在した当時の当主は喜録であるが、その先代の治助から見てみよう。

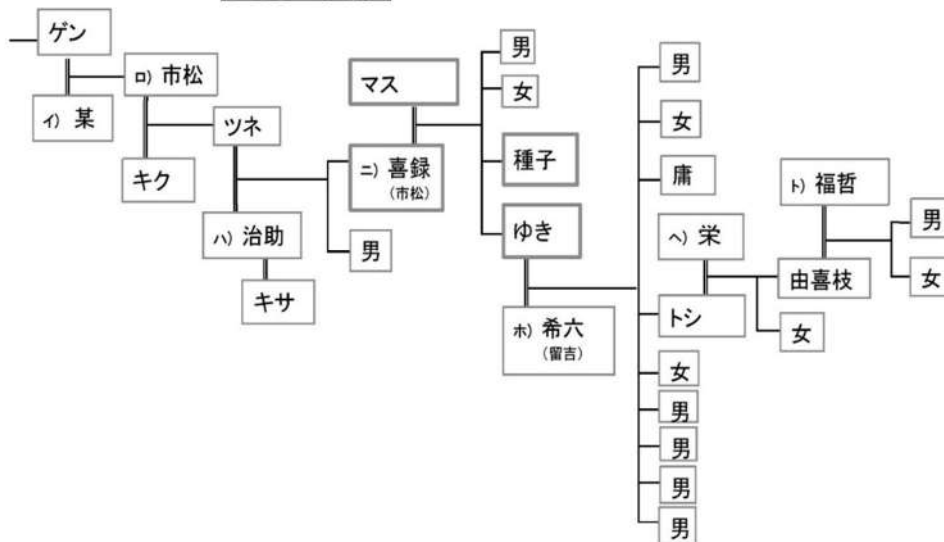
治助は、1837(天保8)年に布良の黒川家に生まれ、後に小谷市松(喜六)の婿養子となっている。明治に入って漁師頭や1884(明治17)年に布良村会議員、相浜村との合併後の富崎村会議員、そして富崎村土木委員・衛生委員などの要職を歴任している。また、日本赤十字社の正社員であり、布良の大火の時だけでなく七浦沖漁船遭難の時や富崎村の避病院設立に関わって、困窮している人びとへの寄付金などで社会貢献をしている。さらに、産業振興では安房水産会の富崎村委員であり、安房の近代水産業にとって先駆的な房総遠洋漁業株式会社の株主になっている。

当時の富崎村がかかえていた漁業問題を解決するために、治助は神田吉右衛門村長とともに、「富崎村布良区水産談話会」の会議録(館山市博物館所蔵)によると、船主や漁師のあり方や漁船遭難防止のこと、漁船改良などの問題をどう解決していったらいいか、さまざまな立場の人が意見交換をしている。なかでも治助らのような人びとが熱心に取り組んだことで、日本の近代水産業が発展していったのかもしれない。1902(明治35)年、治助は富崎村長石井嘉右衛門から銀杯とともに授与された感謝状には、「明治初年元布良村漁師頭に選任されて以来漁業に関する諸種公務に従事した」などと記載されている。その年の秋に治助は65歳で亡くなっている。

5. 内村鑑三に影響を与えた神田吉右衛門

布良の村政において、治助とパートナーとなった人物は、3つ年上の神田吉右衛門である。神田は旧富崎村

小谷家の家系図



の発展にとって重要なリーダーであり、富崎小学校の入口に大きな顕彰碑がある。

1834(天保5)年布良の満井家に生まれ、25歳で神田家の養子となり、吉右衛門となる。1873(明治6)年、アワビ漁や売買などを村の共有財産にして、その収益は小学校の授業料減額や教科書貸与などの資金に使い、近隣の村の子どもたちにまで奨学金を援助するという画期的な政策をおこなった。この頃、小谷喜録は小学校に入っていたので、その恩恵を受けたと思われる。

また、全村の大火では復旧事業に奔走し、その後のコレラ流行でも村民の先頭に立って予防に努めた。そして、1882(明治15)年、神田は器械式潜水でのアワビ漁を村営事業として、収益はそっくり公共事業に使っている。なかでも水産増殖や遭難船の救済制度などは、全国でも模範的な取り組みといわれた。1889(明治22)年に布良村と相浜村が合併して富崎村となり、神田は1893(明治26)年に村長となった。

なお、キリスト者として有名な内村鑑三は、自著「余が聖書研究に従事するに至りし由来」において、神田翁との出会いが人生の転機となったと書き残している。水産伝習所の教師であった29歳の内村は、先の関澤書簡にあった実習で布良に同行した際、56歳の神田と出会い、「いくら漁具を改良し、新奇な網道具を工夫しても、彼等漁夫を助けてやりことはできない」「なによりも先に漁師を改良しなくてはだめだ」という言葉を聞き、強い感銘を受けている。「ある決心を強め…本職として従事した職をなげうった」として、水産教育者から宗教家へと導かれることになったという。

6. 青木繁を世話した小谷喜録

青木繁らを世話した当主は、喜録である。1864(元治元)年に小谷治助の長男として生まれ、幼名を市松という。10歳の時に寺院龍樹院が布良小学校となり、卒業した後は上真倉村(現館山市)の石井定吉に師事し、その後千葉師範学校教員の手嶋春治や小池民治について教育学を修めていた。さらに学ぶために上京したと思われるが、それまでどのように過ごしていたかは不明である。

23歳の頃に千葉県から授業生(教員)として地方免許状(4年間有効)を得て、1888(明治21)年2月には、富崎尋常小学校教員(授業生)になった。当家から大量の



教科書が見つかっており、治助と喜録の蔵書印が押されている。物理学や地理学などの専門教科もあり、小学校で使用されたとは考えにくく、どこかの上級学校で学んだのかもしれない。東京に出て、水産関係の勉強をしたのではないかとも思われる。

そして、2年後の1890(明治23)年4月、喜録は教員を辞めている。前年11月にあった布良大火では自宅も含め、74戸が焼失している。父の治助は大火後の復旧事業で役職が忙しく、結局、喜録は教員の職を辞して家業を継ぎ、自宅の再建にあたったのではないかと推察される。

1891(明治24)年、喜録27歳が大日本水産会会員として認められた同年に、石井嘉右衛門村長の娘マス17歳と結婚している。義父が村長であった1902(明治35)年の村議会予算書の一部が当家から発見され、その宛名は「村会議員小谷喜録殿」と記されており、38歳のときに村会議員であったことがわかった。その後、喜録の葬儀に村長が述べた弔辞が見つかり、その記載から1901(明治34)年4月に村会議員に初当選したとわかった。弔辞の内容を他の資料と重ねると、喜録が6期連続で村会議員を務めていたことが確認できる。青木繁が滞在した1904(明治37)年は40歳で、2期目の村会議員であったようである。

神田吉右衛門が亡くなった後、石井嘉右衛門が村長になり、喜録はその前年に村会議員になっている。義父嘉右衛門の村政を支えるとともに、神田や父治助の水産改革を継続する村議会を実現していくために、布良漁業組合長や富崎村消防組頭になったと考えられる。

弔辞には、水害や火災の警防に尽力していたことが、結果として1903(明治36)年3月24日に大日本帝国水難救済会布良救難所看守長を命じられたと述べられている。日露戦争前年の緊張状態のなかで、大日本帝国水難救済会の役割は、沿岸警備を兼ねる大きな意味があり、看守長とは誰にでもできる仕事ではなかったようである。

喜録は1923(大正12)年6月から、なぜか3ヶ月間だけ富崎村助役に就任している。関東大震災の9月1日には、喜録が助役として、全力をあげて復興のために奔走したことが『大正大震災の回顧と其の復興(下巻)』(千葉県罹災救済会・昭和8年刊)に記載されている。その激務の心労で病気になる、助役を辞めることとなり、その後療養を続けたものの、1926(大正15)年に62歳で亡くなっている。

葬儀に際して、村民を代表して弔辞を述べた渡邊福

治郎村長は、関東大震災のとき被災民の救助に力を尽くし、布良漁港の復旧工事では昼夜を問わず人力を提供し、監励したということを強調している。

なお、青木が滞在した当時の家族は、喜録夫妻と2人の娘、(10歳の種子と6歳のゆき)、継母のキサであった。種子は21歳で早世しているものの、千葉女子師範学校に学び、東葛飾郡川間尋常小学校の教師となっている。喜録が教育熱心だったことがうかがえる。

青木繁が会った40歳の小谷喜録は、単に船主というだけでなかった。教育者であり、政治家でもあり、また文化や芸術にも造詣が深く、なかでも俳諧においては角田竹冷や前田伯志などの俳人とも交流をもっていた。これが4人の若者を40日も無賃で世話をし、《海の幸》誕生をささえた人物像だったのである。

また、当家のとなりの布良崎神社では、当時8月1日に祭礼があった。1トンもの神輿に、青木は驚いたことだろう。神輿世話人の島田吉廣氏は、《海の幸》は布良崎神社の神輿【表4】を描いたものだと言っている。「漁師が並んで歩くことはないし、人をケガさせないように鉾の矢尻を前に向けることも有り得ない。この絵は、歩いている人の肩の位置が揃っていて、前方の人は前傾姿勢で、後方の人は直立している。これは神輿を担ぐ格好にそっくり。明治時代は、男衆が女装束で神輿を担ぎ、そのまま夕日の海に入る御浜くんだりという神事があった。海から上がると着物は濡れてはだけ、褐色に灼けた男衆の肌も神輿も黄金色に輝く。喜録さんは氏子総代だったから、青木も神輿を担がせてもらったかもしれないね」

7. 石井嘉右衛門の子孫をたずねて

小谷喜録の妻マスの実家は、相浜の石井家である。父の嘉右衛門は富崎村長であった。

先頃、石井家の当主英夫氏と御子息の雅人氏にお会いする機会があり、石井家に代々伝わる古文書類を拝見した。その中に実に興味深い資料があった。

1889(明治22)年8月の消印がある嘉右衛門宛てに山下安民なる人物よりの書簡がある。その内容は山下が「勝伯」のもとを訪れた際の会話で、「白浜灯台」建設のために「勝伯」が石井家に宿泊していたことを思い出し、とても話が盛り上がったとのこと、そこで山下が「勝伯」より石井家に書を託されたので、石井家より直接、礼状を出して欲しいというものであった。

この「勝伯」とは、幕末に活躍した勝海舟と思われる。1869(明治2)年に全国で2番目に白浜・野島埼灯台が

建設されている。幕末から明治初期において、対外政策上、灯台建設は極めて重要な施策であったが、なぜ富崎・相浜の石井宅を訪れたのかが注目される。そのなかで富崎候補地の一つであった可能性が考えられる。



なお、山下の書簡とともに、裏側には「勝安房守」と書かれた肖像写真(左)と、海舟自筆と思われる和歌が残っている。

阿波と見し
安房の洲崎に風あれど
漂う船の 世の姿かな

8. 未来にむけて

いよいよ小谷家住宅の修復工事が始まり、2016(平成28)年には青木繁《海の幸》誕生の家として一般公開が始まる。これに先立ち、同寸大の《海の幸》《わだつみのいろこの宮》【口絵1】複製画も制作され、来訪する方々は青木繁の息吹を感じると言ってくれる。青木繁という一人の画家を通じて、全国の皆さんと交流が深まっていくことはとてもうれしい。

先ごろ、当家の納戸から雛人形や高砂人形が数点見つかった。箱に書かれた「げん」という名前から、江戸後期のものではないかと考えられる貴重な文化遺産であろう。春のひな祭りイベントで展示公開したところ、4日間で約200名の方々が来訪された。青木保存会の主婦メンバーが甘酒をふるまい、楽しい集いとなった。

当家にて次々と見つかる古文書や書画から、さまざまな歴史が明らかになりつつある。それまで点でしかなかったものが、少しずつ線に繋がり、さらには面となっていた。その一部は3Dのパノラマのように感じることもあった。先祖の生き様がわかっただけでなく、富崎村の先人たちがどのような努力を重ね、地域社会をつくってきたのかを知り、頭が下がる思いである。

これがきっかけとなって、青木保存会のメンバーは先人の業績を語り継ぐと、富崎小学校にある神田吉右衛門の碑、布良崎神社にある満井武平の碑を磨きはじめている。こうした姿は感動的である。まちづくりとは、学びを通じて人びとが誇りを蘇らせ、生涯現役で生き生きと元気に暮らすまちになっていくことであり、これが地域活性化につながるのではないかとつくづく思う。

最近とくに嬉しいことは、何人かの学生や若い人たちが興味を持ち、調査研究に参加してくるようになってきた。一人でも多くの方々と、学びの楽しさや感動を共有できれば幸いである。古文書の調査研究や整理等などにも関心がある方は、ぜひ青木保存会やNPOフォーラムの会員になって、さまざまな活動に参加して頂ければと願っている。私たちは歴史研究者でも専門家でもないが、地域に生きる市民の目線から、奥深い歴史の一端を明らかにし、未来へつなぐ一助になれば幸いである。

最後に小谷家当主として、関係者の皆様方に御礼を申し上げたいと思います。当家保存のために修復資金を積極的に集めて下さっている、大村智理事長様はじめNPO法人青木繁「海の幸」会の皆様方。当家の管理運営を支えて下さっている青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会および、富崎地区コミュニティ委員会の皆様方。ふるさと納税や文化財保護の行政面でご協力頂いている館山市と館山市教育委員会の皆様方。他にもご理解ご支援を頂いている多くの皆様方に心より

感謝礼を申し上げるとともに、青木繁《海の幸》誕生の家として末永く当家が保存され、皆様の憩いの場となりますように、引き続きお力添えのほどよろしくお願い申し上げます。

小谷家のひな祭り

好評で8日に追加公開

館山

青木繁「海の幸」誕生の家として知られ、保存運動の進む館山市布良の小谷家住宅（館山市指定文化財）で、修復工事を前に今月初め、ひな祭りの公開見学会が行われたが、3日間で延べ200人が来場する人気ぶりだった。このため、8日に急ぎ追加公開することになった。



新たに見つかり公開されている江戸期と推察される雛人形＝小谷家

人形を見つけた。おおよそ半分が集まったため、4月から着工することになり、平成28年春の一般公開を目指している。

房日新聞 2014.3.7

とから、江戸期に制作されたものと推察される。200年を超えたとはいえないほど保存状態もよく、着物の色も美しい。来場者はみな、思わぬ文化財に感動していた。当主の小谷福哲さんは、「先祖のひなさんが、小谷家住宅の保存運動にエールを送ってくれて、人形を見つけた。おおよそ半分が集まったため、4月から着工することになり、平成28年春の一般公開を目指している。」と語った。妻の由喜枝さんは「私が生まれたとき、新しい雛人形を買ったので、60年ぶりに目の目を浴びた人形も嬉しそう」と話した。

青木繁描いた「海の幸」 顕彰するオマージュ展

売上金一部、小谷家住宅修復に



洋画家青木繁（1882～1911）と、代表作で重要文化財の「海の幸」を顕彰するオマージュ展が東京都中央区銀座4丁目の永井画廊で始まった。売上金の一部が、絵が制作された館山市布良の小谷家住宅の修復事業にあてられる。8月1日まで。

小谷家保存のために結成されたNPO法人「青木繁」の作品の前で語る小谷家当主の小谷福哲さん（左）ら（東京・銀座の永井画廊）

朝日新聞 2014.7.21

『海の幸』の画家ら60人が作品を展示、販売する。青木自身による油彩の肖像画も特別出品されている。

オマージュ展は銀座に続き、8月5日から館山市の「渚の駅たてやま」と市コミュニティセンターでも開かれる。関連して7月27日には同市の千葉県南総文化ホールで石橋美術館の森山秀子学芸課長による講演とパネル討論もある。

小谷家住宅の修復・保存は4月に着工し、2016年春の一般公開を目指す。問い合わせはオマージュ展（東京）が永井画廊（03・3547・9930）、講演がNPO法人安房文化遺産フォーラム（0470・22・8271）へ。